

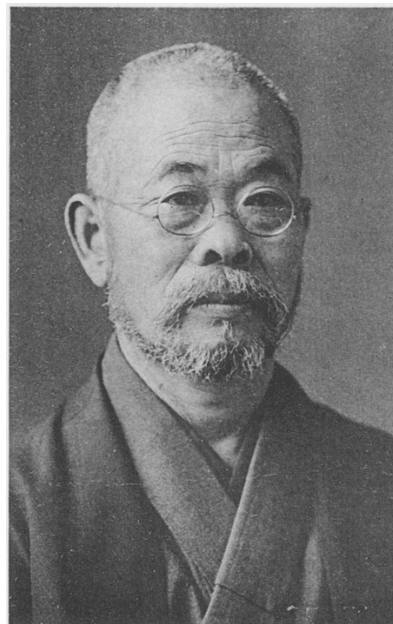
第2章 喜田貞吉の歴史地理学

—未発表の講演録・講義ノートを中心に—

I はじめに

喜田貞吉（第2図）は、明治から大正，昭和初期にかけて活躍した歴史地理学者である。喜田の研究領域は古代史や考古学，民族研究などにも及んでおり，歴史地理学のみ限定されるものではないものの，それは終生の重要な研究テーマの一つであった。喜田が明治32（1899）年に同志らとともに日本歴史地理研究会（のちの日本歴史地理学会）を創立し，機関誌『歴史地理』を発刊したことは，日本の歴史地理学研究史においてしばしば語られる事実である¹⁾。また，京都帝国大学（現，京都大学）などにおいて国史地理を講じたり²⁾，昭和6（1931）年から刊行が始まったわが国初の『地理学講座』において歴史地理分野を担当したりする³⁾など，明治以降の歴史地理学の発展・普及に少なからぬ寄与をなした研究者であった。

喜田の学問については，これまで数々の研究業績がある。古代史の分野では山田野理夫，中村生雄などの研究⁴⁾が，考古学や民族研究では斎藤 忠や中村 豊，上田正昭，湯川洋司などの研究⁵⁾が見られる。しかしこれらの分野での研究蓄積に対し，喜田の学問のコアともいえるべき歴史地理学に関する研究はいまだに多いとはいえないのが現状である。例えば米倉二郎は，自叙伝『還暦記念 六十年之回顧』や没後の追悼録などに基づき，日本歴史地理研究会創立をはじめとする様々なエピソードを取り上げたが，その狙いは「先生の学界における足跡一般を紹介」することであり，必ずしも本格的な研究を意図したものではないと思われる⁶⁾。また筆者も，四国出身の二人の歴史地理学者である喜田と原 秀四郎について論じたが，研究の主眼は両者の交流や学問的共通点の検討にあり，喜田の学問への分析は必ずしも十分とはいえない⁷⁾。その他，福井好行や菊地利夫，浅香幸雄，岡田俊裕らが地理学史研究の一環で喜田の歴史地理学に触れてはいるもの



第2図 喜田貞吉の肖像

資料：『歴史地理』74巻2号，
1939年の口絵より転載

の、いずれもそれを主題としているわけではなく⁸⁾、研究蓄積は多いとはいえない状況にある⁹⁾。

そこで本章では、喜田がわが国歴史地理学の開拓者の一人であるとの認識のもと、その歴史地理学の特徴について考察する。検討にあたり、これまでの研究では取り上げられることのなかった徳島大学附属図書館が所蔵する喜田貞吉関係資料を参考にすることとする。同図書館には自筆原稿や講演録、ノート類などの資料が830点所蔵されており、国内における喜田関係資料の所蔵規模としては最大であると考えられる¹⁰⁾。本章ではこのうち、歴史地理学に関連する未発表の講演録や講義ノートを検討対象とし、かつ公刊されている喜田の論著を参考にしつつ、喜田の歴史地理学を再構成していくこととしたい。

Ⅱ 喜田貞吉の生涯

喜田の歴史地理学について論ずるにあたり、まずはその生涯の足跡について概観していく¹¹⁾。

喜田は明治4(1871)年5月、徳島県那賀郡立江村櫛淵(現在の徳島県小松島市)で農家の次男として生まれた。櫛淵小学校、徳島中学校を経て、明治21年1月に当時大阪にあった第三高等中学校(のちの第三高等学校。現、京都大学総合人間学部)予科補充に編入した。同26年9月には帝国大学文科大学(現、東京大学文学部)の国史科に入学している。大学2年時の授業で提出した論文「国司制之変遷」において国司制度の推移と地方の人文地理との関連などに興味を抱いたようで、明治29年7月に大学を卒業すると、同年9月に「本邦歴史地理(特ニ畿内地方)」をテーマに掲げて大学院に進学した¹²⁾。なお、大学院での研究テーマに歴史地理を掲げたのは喜田が初めてである¹³⁾。

大学院在学中の明治32(1899)年4月、喜田は同志ら9人と共に日本歴史地理研究会(のちに日本歴史地理学会)を設立した。これは明治12年に創立された東京地学協会に続く、わが国で2番目の地理学関連の学会であった¹⁴⁾。後に喜田自身、「歴史地理学と云ふことを標榜して学会が出来て居ることは世界広しと雖も外にない、専ら歴史地理学を研究するために会が出来て居ることはない」¹⁵⁾と自信をのぞかせている。この研究会は10月より毎月、雑誌『歴史地理』を発行し、歴史地理をはじめ史学、地理学などに関する多くの論考を掲載した¹⁶⁾。同時に喜田は、当時希少であった学士の肩書きを活かし、東京専門学校(現、早稲田大学)や國學院(現、國學院大學)などで国史地理や国史を講義したり、中学校用の地理教科書などの執筆に励んだりしていたという。

明治34年5月、喜田は文部省に図書審査官(のち文部編修に就任)として就職し、教科書検定の業務を担うこととなった。加えて同39年9月からは東京帝国大学史学科にて地理学や国史地理を、同41年2月から京都帝国大学史学科で国史地理、日本古代史などを講義していたが¹⁷⁾、明治43年12月、編修した日本歴史教科書が原因で勃発した南北朝正閏問題で非難されて文部省を休職(大正2年休職満期)すると、その後はもっぱら教育・学究活動に専念することとなった。

ところで喜田は文部省在勤中の明治 39 年から同 42 年に、建築史家の関野貞との間で平城京に関わる歴史地理学上の論争を行っている。喜田はこの論争で執筆した論文を中心に、同じく関野との間で起こった法隆寺再建・非再建論争に関わる論文をあわせ、明治 42 年 3 月に「平城京ノ研究」と題する博士論文を東京帝大文科大学に提出した。同年 10 月には文学博士の学位を取得しているが¹⁸⁾、歴史地理学を主テーマとして博士学位を取得したのは、喜田の国史科の後輩である原秀四郎、『大日本地名辞書』の吉田東伍に次いで 3 人目であった¹⁹⁾。

さて、喜田は文部省の休職満期後、引き続き京都帝大で講義を担当するとともに²⁰⁾、大正 8 (1919) 年 1 月からは雑誌『民族と歴史』（のちに『社会史研究』）を発行し、日本民族のルーツと沿革について考古学的視点を用いつつ探求するようになった。同 13 年 9 月からは東北帝国大学法文学部で日本古代史、考古学などの講義を受け持つとともに²¹⁾、東北地方の古代民族研究や遺物遺跡の考古学的研究を行った。一方で大正 7 年から 4 年間江戸時代の大名領地沿革調査を進めたり、下って昭和 6 年からはわが国初の地理学講座に『日本の歴史地理』（正・続）を執筆²²⁾したりするなど、終生歴史地理学から離れることはなかった。亡くなったのは昭和 14 (1939) 年 7 月、享年 69 歳であった²³⁾。

以上、喜田の足跡について、特に歴史地理学との関わりを意識しつつ概観してきた。以下においては喜田の歴史地理学に焦点を当てて考察を進めることとしたいが、それに先立ち、まずは検討のベースとなる徳島大学附属図書館の関係資料、とりわけ喜田の未発表の講演録・講義ノートについて検討しておくこととする。

Ⅲ 未発表の講演録・講義ノート

これまで喜田の学問を研究する資料としては、公刊された論著がほぼ唯一のものであった。しかし平成 16 (2004) 年、徳島大学附属図書館に喜田貞吉関連の資料が大量に寄贈され²⁴⁾、喜田貞吉研究が大いに進展する可能性が生まれた。これを受けて平成 18 年度から同 21 年度にかけて、徳島県立博物館学芸員の長谷川賢二氏が資料の概要調査を行い、喜田貞吉関係資料目録（仮）を作成している²⁵⁾。

長谷川によれば、資料は著作原稿をはじめ、講演録やノート類、日本歴史地理学会などの運営関係資料、収集史資料、書簡類など、計 830 件で構成される²⁶⁾。資料のなかには、喜田の処女論文である「国司制之変遷」の原稿や未発表の博士論文「平城京の研究」の一部原稿、喜田が古代の部分執筆した『日向国史』の原稿、自叙伝『還暦記念 六十年之回顧』の原稿など重要著作の原稿類が見られる。さらには日本歴史地理学会での未発表の講演録や東京帝大・京都帝大などでの講義ノートなどもあり、その学術的価値は高い²⁷⁾。その他、喜田が当事者となった南北朝正閏論に関わる書簡類など、貴重な多々資料が含まれる。

これらの資料のうち、新たな知見を得る上で重要なのは講演録や講義ノートである。これらは著作原稿と異なって未発表のものがほとんどで、公刊論著からは十分うかがえない喜田の特質や傾向が浮かび上がる可能性がある。そこでここで

第1表 喜田貞吉の講演録・講義ノート(歴史地理関連)

区分	表題	時期	備考	番号
講演録	歴史地理	明治40(1907)年5月上旬	講演会名は不明	A43
	歴史地理学	明治41(1908)年8月15日	日本歴史地理学会鎌倉講演会での講演	A4
	行政区画沿革一般	明治42(1909)10月16日	東京市教育会・本郷区教育会連合開催「通俗講談会」での講演	A41
	行政区画沿革一般(続き)	明治42(1909)10月16日	東京市教育会・本郷区教育会連合開催「通俗講談会」での講演	A40
	歴史地理学一斑	明治42(1909)年10月25日	華族会館火曜会での講演	A7
	地理学とは何ぞや 第一回	明治43(1910)年7月21日	下関講演会(主催者不明)での講演	A38
	山陰地方の古代(上)	大正6(1917)年8月5日	日本歴史地理学会米子講演会での講演	J28
	山陰地方の古代(下)	大正6(1917)年8月6日	日本歴史地理学会米子講演会での講演	J27
	上代の帝都	(不明)	京都帝国大学夏期講演会での講演	A5
講義ノート	日本地理講義	明治33(1900)年1月開講	東京専門学校文学部史学及英文学科での講義	F23
	国史地理講義稿 第一	明治39(1906)年9月開講	東京帝国大学文科大学史学科での講義	H12
	国史地理概説	明治42(1909)年9月開講	東京帝国大学文科大学史学科での講義	H27
	国史地理三(行政区画)	明治43(1910)年9月開講	京都帝国大学文科大学史学科での講義	B6
	国史地理学	大正元(1912)年9月開講	京都帝国大学文科大学史学科での講義	K5
	国史地理講義	大正3(1914)年9月開講	京都帝国大学文科大学史学科での講義	D72
	国史地理講義	大正5(1916)年9月開講	京都帝国大学文科大学史学科での講義(5月講了)	B11
	(不明)	(不明)	東京帝国大学または京都帝国大学での講義ノートと推定	K6
	国史地理概説二	(不明)	東京帝国大学または京都帝国大学での講義ノートと推定	H9
	国史地理講義稿四	(不明)	副題「徳川大名領邑沿革 附関原役以前諸将領有資料」	H20
	(国史地理講義)	(不明)	表紙がなく資料名不明(記載の標題は仮)	B10

注1) 表右端の番号は「喜田貞吉関係資料目録(仮)」に記載された「予備整理番号」を指す。

2) 講演録「地理学とは何ぞや 第一回」(A38)は地理学全体を取り扱うものであるが、一部歴史地理学論を含むことから本表に取り上げた。ただし第二回(翌7月22日実施)は地理教育を中心とする内容であるため割愛した。また「日本地理講義」(F23)については、内容が主として歴史地誌であることから記載した。

資料:長谷川賢二「喜田貞吉関係資料目録(仮)」, 2009。同目録については本文注24)を参照のこと。

はこれら講演録や講義ノートを検討対象として取り上げ、喜田の歴史地理学に対する言説について探ることとする。

喜田の講演録・講義ノートのうち、歴史地理学に関連するものは講演録9件、講義ノート11件である²⁸⁾(第1表)。講演録(第3図)については日本歴史地理学会での夏期講習会や京都帝大、各種講演会での筆記録であり²⁹⁾、「歴史地理」「歴

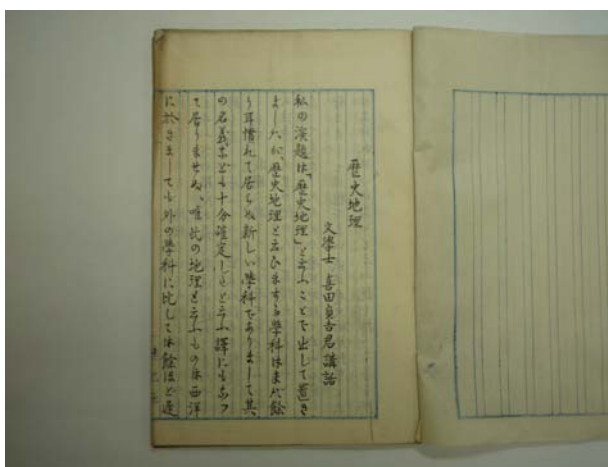
史地理学一斑」などのように歴史地理学そのものの性格を論ずる講演録もあれば、

「上代の帝都」「山陰地方の古代」などのように個別のテーマを論ずるものもある。これらの講演録はいずれも未発表であり³⁰⁾、かつ著作目録にもほとんどリストアップされておらず³¹⁾、喜田の歴史地理学を知る上で大変貴重である。ここで

は特に「歴史地理」「歴史地理学一斑」

などといった歴史地理学論を主題とする講演録を中心に検討していく。

もう一つの講義ノート(第4図)については、主として東京帝大や京都帝大での講義に使用したノートであり³²⁾、こちらもいうまでもなくすべて未発表である³³⁾。受講生などの回顧によれば、喜田は講義ノートを作らず、教室には備忘のためのメモの類を持ち込むだけであったという³⁴⁾。しかし残存



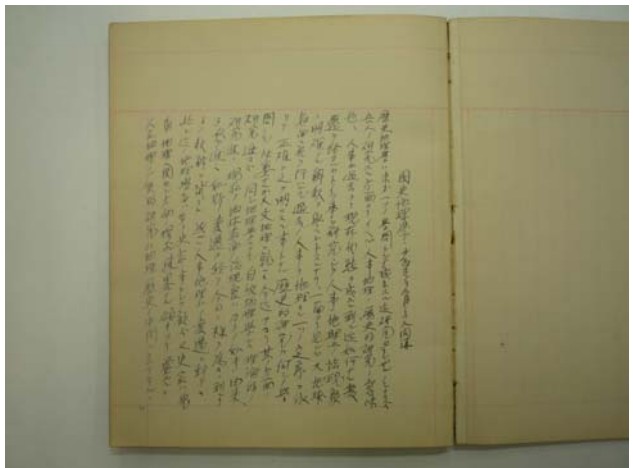
第3図 講演録「歴史地理」

注)筆跡は喜田ではなく筆録者のものと推定

写真提供:徳島大学附属図書館

するノート群を見る限り、かなり克明な講義ノートを作成しており、教室に持ち込まなかったにせよ、入念な準備をしていたことが伺える。従来ほとんど語られることのなかった喜田の一面である。

次節においては、このような未発表の講演録と講義ノートを中心に、公刊された論著も参考にしながら、歴史地理学に対する喜田の学問観や研究内容の傾向などを考察していくこととする。



第4図 講義ノート「国史地理学」

写真提供: 徳島大学附属図書館

IV 喜田貞吉の歴史地理学の特徴

この節では、喜田の歴史地理学の定義、隣接領域である人文地理学や歴史学との関わり、および具体的な研究領域の3点に関して、主に講演録と講義ノートを踏まえて考察を進めることとする。

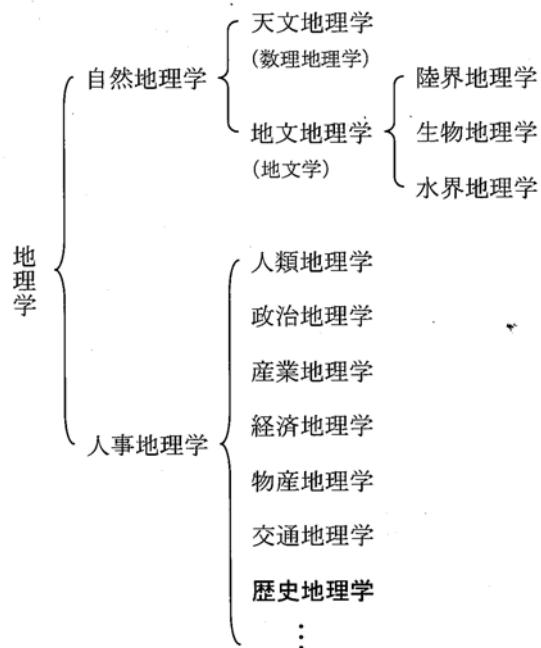
(1) 歴史地理学の定義

これまで喜田の歴史地理学については、地理学の一分野としての歴史地理学ではなく、単に歴史学の一補助学または歴史の地理的解釈であるとして、地理学からはマイナーに評価されてきた傾向がある。例えば菊地は、「喜田貞吉教授は歴史地理学とは歴史の地理的解釈である」との立場に立っていたとし、その学問を「地理的歴史」と見なした³⁵⁾。米倉もその歴史地理学を「史家の有力たる史料の一つとして研究するという、歴史の補助学」³⁶⁾と見なし、岡田も喜田を「歴史研究の補助として地理を考察しようとする歴史家」³⁷⁾と評している。しかし喜田自身はいくつかの論著の中で、歴史地理学を地理学の一部と位置づけており、歴史学とは一線を画する考えを示している³⁸⁾。この学問観は、必ずしも従来の評価とは一致しない。この点について、講演録や講義ノートではどのように語られているのであろうか。

まず検討するのは、明治43(1910)年の講演録「地理学とは何ぞや 第一回」である³⁹⁾。ここで喜田は、地理学の分類について述べている。喜田は地理学を大きく「自然地理学」と「人事地理学」⁴⁰⁾に分け、「自然地理学」には「天文地理学」と「地文地理学」を、「人事地理学」には「人類地理学」「政治地理学」「産業地理学」「経済地理学」「物産地理学」「交通地理学」および「歴史地理学」などを含めている⁴¹⁾(第5図)。歴史地理学については「人事地理学を通じて如何に過去より発展進歩して今日の状態を成すに至ったかの変遷の跡を研究する」分野と定義している。ここからも喜田が、歴史地理学を地理学(人事地理学)の一分野として明確に位置づけていたことが分かる。

また、明治40年の講演録「歴史地理」⁴²⁾では、喜田は歴史地理の現状について「我国に於ても多少歴史家と云ふものが注意し又其の他の人も耳慣れて来るやうになつて来ました」と指摘し、その上で、歴史地理学を次のように定義している。

一口に言へば今日の人文地理の有様、其の人文地理の有様が、過去に於いてどう云ふ道筋を経て今日の如く移變つて来たか、即ち現代の地理は過去からどう云ふ變遷を経てきたかと云ふ其の道筋を研究するのが歴史地理の本体（読点を追記）



第5図 喜田貞吉の地理学分類と歴史地理学
資料:「地理学とは何ぞや 第一回」(予備整理番号 A38),
徳島大学附属図書館所蔵

ここで喜田は、明らかに地理学の枠組みにおいて歴史地理を論じている。さらに喜田は、現在を扱う通常の地理学と過去を対象とする歴史地理学との関係について、次のように指摘している。

地理学と云ふのは此の世界の状態を横に研究する（略）此の世界の有様を研究するに横に研究すると云へば現在ばかりではない、過去の時代を横に切つて研究することも出来ます（一部句点を読点に変更）⁴³⁾

「過去の時代を横に切つて研究する」という言説には、のちに京都帝大地理学教室の小牧実繁が提唱した「時の断面」説⁴⁴⁾を想起させる。喜田にとって歴史地理学は、単なる歴史研究の補助手段的な存在ではなく、あくまで現在の地理とつながる地理学の一分野であった。このような考えは東京帝大や京都帝大における講義ノートにも見られ、一貫した学問観であったといえよう。例えば1912年9月の新学年度における京都帝大での講義ノート「国史地理学」にも、次のような言辞がある。

歴史地理学ハ（略）人事地理ノ歴史的研究ノ意味ナリ。人事ガ過去ヨリ現在ノ状態ヲ成スニ到ル迄如何ナル變遷ヲ経タルカトイフ事ヲ研究シテ人事地理上ノ諸現象ニ明確ナル解釈ヲ与ヘントスルナリ（一部読点を句点に変更）⁴⁵⁾

このように喜田の歴史地理学は、過去から現在に至るまでの地理的変遷を明らかにし、それに基づいて地表上の諸現象に明確な説明を加えようとする学問であった。

以下では、このような性格を有する歴史地理学が、人文地理学や歴史学といった隣接領域とどのように関わるのかを検討したい。隣接領域との関わり方の検討を通じて、歴史地理学の性格がより浮き彫りになる可能性がある。

(2) 隣接領域との関わり

a. 人文地理学との関わり 喜田にとって歴史地理学は、それ自体に対する学問的興味以外に、ある別の目的のために取り組むべき研究領域でもあった。すなわちそれは、自然地理学に対して当時未発達の状態にあった人文地理学の確立に貢献するという目的である。喜田が歴史地理学に取り組んだのは、こうした思いが背景にあったことは、喜田の講演録や講義ノートからも随所にうかがえる。明治42年の講演録「歴史地理学一斑」^{ママ}には、次のような言明が見られる。

自然地理学の方は早くから研究が進みましたが、人事地理学の研究は、余程遅れて居りまして、単に現在の人事の有様を説明することに止つて、自然地理学の方では、山川の由来、或は其他の諸現象との関係と云ふやうな事に就て、精密の研究が出来て居りますに拘らず、人事の方では、是に伴つた研究が十分出来て居りませぬやうな次第であります（略）歴史地理学の必要と云ふものは、詰り人事地理学を十分説明する上に於て起つて来ることであらうと考へて居ります⁴⁶⁾

自然地理に対する人文地理の未発達という学問観は、明治40年の論考「地理学に関する余輩の見解」などにも見られ、喜田の強い問題意識の一つであった⁴⁷⁾。喜田によれば、このように未発達の状態にある人文地理学が進歩するためには、本来の対象である現在の地理だけではなく、過去の地理に対する研究が不可欠である。すなわち現在の地理を明らかにするためには、「単に今日の地図のみを見た」⁴⁸⁾り現在の自然条件を考察するだけでは不十分であり、「過去の人事上の原因を求める」⁴⁹⁾ことが重要である。歴史的研究ができて初めて、人文地理学は地理的事象の因果関係を踏まえた「精密の研究」ができ、自然地理学に伍することができるのである。

しかし喜田は、このような人文地理学の歴史的研究は、従来いわゆる空白地帯であったと指摘する。

人事地理上ノ変遷ニ到テハ、此レ迄ノ地理学者ハ多ク史家ノ事トシテ顧ズ、又史家ハ兎角地理ニ関セシ方面ノ探求疎略ナル傾キアリ。要スルニ人事地理ノ歴史的研究ハ、双方ヨリ捨レラレタル趣アリ（原文に句読点を追記）⁵⁰⁾

喜田によれば、人事（人文）地理学の歴史的研究は地理学者からも歴史学者からも見向きされなかったという。喜田が歴史地理学に手を染めたのは、一つには空白地帯であった人文地理学の歴史的研究に取り組むことで、相対的に未発達であった人文地理学を活性化したいという思いがあった。喜田が明治32年に日本歴史地理研究会を設立した背景にも、恐らくこのような問題意識があったと思われる⁵¹⁾。この点に関連して、同じく設立メンバーであった大森金五郎は、もっぱら歴史を研究する史学会（機関誌『史学雑誌』）や自然地理学に傾斜する東京地学協会（機関誌『地学雑誌』）に対し、日本歴史地理研究会は両者がカバーしていなかった人文地理、歴史地理を研究するのが役割であると明言している⁵²⁾。喜田をはじめとする研究会創設者らにとって、歴史地理研究の狙いの一つが人文地理学の活性化にあったことは疑い得ないであろう。

b. 歴史学との関わり 同時に喜田は、歴史地理学が人文地理学だけではなく、隣接科学である歴史学にとっても重要な学問であると考えていた。喜田はまず地理と歴史の関係について、講演録「歴史地理」で次のように述べている。

人は土地の上で総ての動作をやって居るのでありますから、過去の人事が地理に如何なる関係も有たないと云ふことは、余程少ないことであつて、随つて歴史上の事実も地理から定めて往かぬと云ふと、明らかでない事が大変に多いのであります⁵³⁾

歴史的な事象が土地の上で展開され、しかも土地を離れることがない以上、地理は歴史を考える上での重要な基礎を形成するとしている。その上で喜田は、歴史地理学が歴史学にとって重要な補助学であると指摘する。

此の史学と歴史地理学と云ふものが色々密接な関係を有して来る（略）史学の研究の上に間違つた結果を生ずることがある、それらは歴史地理学の研究から訂正して行くことが出来ます⁵⁴⁾

歴史学の資料は主として古記録や古文書であるが、それだけに頼ると必ずしも正確な史実はつかめない。特に古い時代であればあるほど、記録の残存点数は少なくなり、しかも記録内容の信憑性は低下していく⁵⁵⁾。そこで歴史地理学の存在が重要となる。歴史地理学とは「実地に臨んで地勢、地質、遺物、地名、伝説等を調査し、之を種々雑多の記録文書に稽へて、適当なる判断を下す」⁵⁶⁾ 学問であり、文書や記録だけに頼りがちな歴史学に「確かな筋道を与へる」⁵⁷⁾ ことができる、重要な補助学である。しかし、それはあくまで地理学の一分野という立場からであり、たんなる歴史学の一補助学として位置づけられていたのではなかった点は注意する必要がある。すでに述べたように地理学は「世界の状態を横に研究する」学問であるが、これに対して歴史学は「過去から現在に及んで其の移り変りを豎に研究する」⁵⁸⁾ 科学であると位置づけていた。すなわち喜田にとって地理学と歴史学はそれぞれ独立した異なる知識体系であった。

以上、喜田の歴史地理学に対する学問観について論じてきた。喜田の言説からは、従来しばしば指摘されてきたような、歴史地理学を単なる歴史学の一補助学や一研究法と位置づける考えを見出すことはできなかった。喜田の学問観は近代的な学問分類に沿って形成されたものであり、その意味では今日に通じるものがあったといえることができる。

(3) 研究テーマと具体的内容

ここまでは喜田の学問観について取り上げてきたが、それでは実際に喜田は、どのようなテーマを取り上げて研究を進めていたのであろうか。すなわち喜田の歴史地理学観が、実際のテーマ選定や研究内容にどのように反映されていたのであろうか。

まず研究テーマの選定に関しては、喜田の講義ノートの章構成からその傾向がうかがえる。例えば大正元（1912）年開講の「国史地理学」では、「位置」をはじめ「広表（領土の沿革）」「地勢」「気候」「住民（種族・人口）」「産業」「交通」「政治区画」「帝都都邑」「城砦・関塞・墳墓」など、地表面の諸現象に関わるテーマが幅広く取り上げられている⁵⁹⁾。また大正3年開講の「国史地理講義」では、「国史地理学とは何ぞや」に始まり「遺跡の研究」「国号及地名の研究」「版図の沿革」「地方行政区画の沿革」「住民編」「人口」などが取り上げられており⁶⁰⁾、喜田が想定する歴史地理学の研究テーマの概要を知ることができる。この点は地理学講座（修正版）『日本の歴史地理』でも同じようなテーマが設定されている。喜田は歴史地理研究の入門を自然地理と遺物遺跡の研究においており⁶¹⁾、その上で地表上における様々な地理的事象を取り上げ、その歴史の変遷を明らかにしようとしていた。喜田の取り上げたテーマを見る限り、今日でも一部を除き歴史地理の研究対象としても違和感のないものであり、テーマ設定に関する喜田の眼は正鵠を射ていたといえよう。

しかしそれらの研究の中身をつぶさに検討すると、今日の研究水準から見て必ずしも歴史地理といえないものも多分に含んでいる。結論からいえば、喜田の歴史地理学の定義は正しいにもかかわらず、その研究内容は必ずしも歴史地理学とばかり言えないのが実情である。この問題は喜田歴史地理学を知る重要なポイントであるため、ここでは公刊論著なども参考にしながら幅広く検討することとしたい。

喜田は明治40年頃から次第に日本民族史研究に情熱を燃やすようになったが⁶²⁾、これに関連して、歴史地理関連の講義ノートや公刊論著でも古代民族（種族）論を積極的に展開している。そこには明らかに、歴史地理学の範囲を超えた考察を含んでいる。先に見た大正3年開講の「国史地理講義」の「住民編」では、蝦夷をはじめ隼人、倭人、諸蕃、漢人、韓人、天孫民族などを取り上げているが⁶³⁾、これらの項目は民族史に関わる論考である「日本民族概論」や「日本民族の構成」のそれとかなり類似しており、むしろ両者の違いを見出すのは困難である。この歴史地理と民族史との関係について、大正5年開講の「国史地理講義」には以下のような興味深い記述が見られる。

国史地理上尤モ趣味アル研究題目タルモノハ、所謂大和民族ナリ。彼等ハ今日ニ於テ殆ンド同一民族トシテ認メラレ、各自何レモ天孫種族トシテ信ゼリ。
(略) 然シナガラ人種学、解剖学上ノ結果ヨリ云フモ、又土俗歴史等ノ調査ノ上ヨリ云フモ、彼等ハ決シテ単純ナル種族ナラザル事、充分ニ証明サル(一部句読点を補足)⁶⁴⁾

ここでは喜田民族史論特有の大和民族＝複成民族論が展開されているが、「国史地理上尤モ趣味アル研究題目」としつつも、これ以降も地理学的な記述はほとんど見当らず、内容的には古代民族史論で占められている。この点は前述の地理学講座(修正版)の『日本の歴史地理』でも同様であって⁶⁵⁾、歴史地理と民族史論との違いが全く見えない状況にある。

また、喜田がよく取り上げる人口の研究についても、今日からみれば社会経済史的な研究と大差ない記述も見られる。例えば喜田は、上述した「国史地理講義」における「人口」の中で日本の人口調査の歴史に言及し、古代の戸籍や和名類聚抄の郷数、近世大名の石高などから各時代の全国人口を算出する方法について検討している⁶⁶⁾。しかしこの講義ノートには人口の地域的事象についての記述はあまり見られず、ほぼ人口事象に関する社会経済史的ないし歴史人口学的な考察に終始している。

歴史地理学のテーマである都城に関わる代表作『帝都』についても、歴史研究と歴史地理学とが分かちがたく融合している。その序文に「名はこれを「帝都」と称するも、実は帝都を中心とせる著者が古代史上の研究の一斑を公にせるものとす」⁶⁷⁾と断っているが、その研究は歴史地理のみならずまさしく古代史研究にも属するものであり、歴史地理と歴史とが混在するものであった⁶⁸⁾。その博士論文「平城京ノ研究」も歴史地理学的研究を意図したものではあったが、そこには歴史地理学だけでなく、古代における政治史ともいえるべき内容が少なからず含まれている⁶⁹⁾。

歴史と歴史地理との関係を知る上で興味深いのは、昭和14(1939)年の『本邦史学史論叢』に掲載された「日本歴史地理研究の沿革概観」である。ここでも歴史学との近接性が明瞭に現れている。喜田は歴史地理研究の模範的事例として、従来「金科玉条」とされてきた出雲伝説、神武天皇東征伝説、日本武尊東征伝説を地理の観点から検証しているが⁷⁰⁾、内容は記紀や風土記に登場する古地名の考証であり、歴史的事件の舞台に関する研究である。これらは地理学の一分野としての歴史地理学というよりは、歴史のための地理、すなわち歴史の地理的解釈に止まっている印象を拭い去れない。喜田の歴史地理は、実際上は地理学ではなくむしろ歴史学との親縁性が深い事例が多いのが実態であった。その意味で、既往の研究において歴史の地理的解釈と評されたのも、あながち間違いではなかったといえよう。

同時に喜田の歴史地理学には、考古学との境界が曖昧な考察も少なからず含まれている。すでに指摘したように、もともと喜田は歴史地理の入門として遺跡遺

物の研究を重視しており、考古学との親縁性も少なからず見られる。例えば喜田は1912年開講の「国史地理学」において、古墳（円墳・前方後円墳）の形態と名称との関係について次のように述べている。

塚ヨリイヘバ、大別シテ円形、瓢形即チ二丘ヲ有スルモノトナル。瓢形ノモノニハ二子山、瓢箪山ノ名称アリ。丸塚ニハ丸山、鐘子山、茶臼山ナドノ名多シ。但シ稀ニ鐘子山、茶臼山ノ名ヲ瓢形塚ニ命ズルモノアリ（一部句読点を補足）⁷¹⁾

ここで喜田は明らかに古墳そのものについて論じており、この前後の記述を見ても、あまり古墳と地域との関わりについては取り上げられていない⁷²⁾。

このように喜田の歴史地理学は、歴史地理学的内容ばかりでなく、少なからず歴史学や歴史の地理的解釈、あるいは考古学の内容が含まれていた。このことは、研究対象が日本全体であれ一地域であれ同様に見られる傾向であった⁷³⁾。もちろん歴史地理学として価値が高い研究が少なくないことはいうまでもない。若き日の喜田が『歴史地理』に掲載した「遠江国浜名湖口の沿革」などは、その好例であろう⁷⁴⁾。講義ノートについて見ても、例えば上述の「国史地理学」には、都城の平面形態と地形との関係について興味深い記述が見られたり⁷⁵⁾、古墳の配置や分布などから当時の地域性や地域間関係を明らかにしようと意図したりしている記述も見られる⁷⁶⁾。しかし喜田の研究には、歴史地理以外の考察が非常に目立つことも否めない事実である。このため喜田の定義やテーマ選定は現代の歴史地理学とも通じるものがある一方で、その具体的な研究内容は、今日的な視点から見て必ずしも歴史地理の領域には収まっていないといえる。

V 喜田貞吉の評価

このような喜田の学問観や研究内容について、当時の（歴史）地理学者達はどうのように評価していたのであろうか。ここでは特に、京都帝大の史学科において喜田と交流があった地理学教室関係者の言説を取り上げたい。

まず検討するのは、地理学教室の初代教授である小川琢治の反応である。小川はその著『人文地理学研究』において喜田の大和平野の条里研究に言及し、それが歴史地理学的研究であるとしつつも、「我々は歴史家の助力を仰ぐに満足せず、我々独特の手掛りを求めて此の方面（村落の歴史地理学的研究―筆者注）を開拓せねばならぬ」⁷⁷⁾と述べている。すなわち喜田は歴史家であり、その歴史地理学は必ずしも小川らが目指す地理学独自の方法に立脚するものではないとの見解を示している。

また、小川の下で初代助教授を務めた石橋五郎も、喜田が創設した日本歴史地理学会について「元来この学会は一般歴史家の団体であつたから、その主要な仕事はどこ迄も歴史の行はれたる舞台としての地理の考証で、歴史のために存する地理であつた」⁷⁸⁾と指摘している。これは喜田自身の学問に対するコメントでは

ないが、喜田の歴史地理学に対する認識とそれほど大きく異ならないと思われる。やはり小川と同様、石橋にとっても喜田は「歴史家」であり、地理学者とは一線を画するものであった。

時代はやや下るが、京都帝大での喜田の受講生でもあった歴史地理学者の藤岡謙二郎も、喜田の歴史地理学にネガティブな評価を与えている。

その著『帝都』は学窓を出てからの私の研究に大きな役割を演じたし、大名領国の研究もまた同様であり、今でもその恩恵に浴している。しかし私は、(略)喜田を歴史地理学者だとも思っていない⁷⁹⁾

さらに藤岡は、別の著書でも「喜田貞吉の歴史地理学の定義（歴史地理学を地理学の一部とする定義一筆者）は正しいにもかかわらず、その研究は実際には歴史の地理的研究に終わった」⁸⁰⁾との評価を与えている。

喜田自身も特に昭和以降、自らの歴史地理研究が地理学者のそれと異なることを自覚していたようで、地理学講座（修正版）の一冊である『歴史地理学概説』には「本編は著者独自の見解を以て、何等他の学者の研究及び発表を参考にする事なく（略）起稿したものなれば、述べて委曲に渉る能はざるは勿論、体系上に於ても不完全なる所が頗る多からうと思ふ」⁸¹⁾と述べている。恐らくは、当時京都帝大地理学教室を中心に発展しつつあった歴史地理学の成果を十分盛り込めていない点を踏まえてのことであろう。喜田は小川や石橋、および同じく地理学教室の小牧実繁らと親交があったようで、その歴史地理学的研究に触れる機会も少なくなかったと思われる⁸²⁾。このような経験から、喜田は自らの歴史地理が「独自の見解」に基づくものと自覚するようになったと考えられる⁸³⁾。

もっとも喜田の歴史地理学の学問観は、恐らく小川や石橋、藤岡ら地理学者とそれほど違わなかったのであろう。それは藤岡の「定義は正しい」とする評価からもうかがえる。しかし喜田への評価は学問観ではなく実際の研究内容から形成されたようで、小川らの眼には歴史学の地理的研究ないし補助的手段としての歴史地理学と映ったようである。このため喜田の歴史地理学は、今日に連なる歴史地理学の源流である京都帝大地理学教室からは異質な存在として認知されていたといえる⁸⁴⁾。

以上、喜田の学問に対する評価を検討したが、喜田の歴史地理学は、当時の京都帝大の地理学者からはあまり肯定的に評価されず、影響を与えることもなかったと推測される。この点は、京都帝大以外の地理学者についても同様であった可能性が高いといえよう⁸⁵⁾。もっとも歴史学の分野においては、喜田の歴史地理学は受容され継承されたようであり、歴史学における斯学の発展には一定の役割を果たしたと思われるが⁸⁶⁾、それはあくまで地理学界における歴史地理学とは別の系譜として見るべきであろう。

VI おわりに

本章では、これまで十分論じられてこなかった喜田貞吉の歴史地理学について、徳島大学附属図書館が所蔵する未発表の講演録・講義ノートを中心に検討を行ってきた。従来、喜田の歴史地理学は歴史学の一補助学や歴史の地理的解釈としてマイナーに評価されることがあったが、喜田自身の意図はその評価とは異なり、歴史地理学を地理学の一分野と明確に位置づけ、地理学固有の視点で研究を進めようとしていた。さらにその研究は、自然地理学に対して未発達の状態にあった人文地理学の発展に寄与することを期するものであった。その意味においては、従来の地理学史における評価には大きな誤解があったといわざるをえない。

しかし実際の研究においては、歴史地理学の定義や位置づけは的確であったにもかかわらず、取り扱う内容は歴史地理学固有の領域を超えるものであった。それは専門とする古代史や考古学そのものであったり、歴史の地理的解釈であったりと、必ずしも歴史地理とはいえない内容を少なからず含んでいた。この点を見る限り、従来の喜田評価が全て間違っていたとは言い切れない面がある。従って当時の地理学者などからは、その研究は地理学としての歴史地理学とは見なされず、結果的にその後の歴史地理学は、喜田とは別に京都帝大地理学教室を中心として発展していくこととなった。喜田が歴史地理学を通じて発展を目指していた人文地理学も、喜田とは全く別の系譜で発展していったと思われる⁸⁷⁾。

とはいえ近代地理学が生成・発展していった時代にあって、地理学の一分野としての歴史地理学の推進を目指した点は注目に値しよう。同時にそれを通じて、自然地理学に対して未発達の段階にあった人文地理学の発展を企図したことは、当時としてはかなり先進的な考えであった⁸⁸⁾。結果的にその意図は実際の研究において十分達せられなかったにせよ、喜田の学問は今後、地理学史研究において再評価していく必要があるだろう。

【注】

- 1) 例えば①福井好行「日本歴史地理学の展開」歴史地理学紀要Ⅰ（本質と方法）、1959、2-3頁、②浅香幸雄編『日本の歴史地理』大明堂、1966、2頁などを参照。
- 2) 喜田は京都帝国大学をはじめ東京帝国大学（現、東京大学）、東京専門学校（現、早稲田大学）などで国史地理を担当している。詳しくはⅡ章参照。
- 3) ①喜田貞吉『日本の歴史地理』（地理学講座10・12）地人書館、1931、1932、②同『日本の歴史地理（続）』（地理学講座13・14・15）地人書館、1932。なお、本講座修正版の刊行が昭和11（1936）年から始まり、喜田は翌12年に『日本の歴史地理』『歴史地理学概説』の2冊を執筆している。③喜田貞吉『日本の歴史地理』（修正版地理学講座4）地人書館、1937、④同『歴史地理学概説』（修正版地理学講座13）地人書館、1937。
- 4) 山田野理夫『歴史家 喜田貞吉』宝文館出版、1976、同『古代史の先駆者—喜田貞吉（人間選書51）』農山漁村文化協会、1981、中村生雄「＜古代＞の表象—喜田貞吉の古代史研究と東北—」大阪大学日本学報23、2004、1-15頁など。なお、山田の『歴史家 喜田貞吉』は、古代史学者としての喜田の研究にとどまらず、喜田に関する総合的な伝記研究の性格を有している。

- 5) 斎藤 忠「学史上における喜田貞吉の業績」(同編『日本考古学選集 8 喜田貞吉集』築地書館, 1972) 2-12 頁, 中村 豊「考古学から見た喜田貞吉の評価」史窓 36、2006, 20-25 頁, 上田正昭『日本民俗文化大系 5 喜田貞吉 歴史学と民俗学』講談社, 1978, 湯川洋司「喜田貞吉の民族史論と柳田国男の山人論—「山人考」とのかかわりを中心に—」比較民族研究 17, 2000, 124-138 頁など。
- 6) 米倉二郎「喜田貞吉先生の人と学問」歴史地理学会会報 100, 1978, 10-13 頁。
- 7) ①川合一郎「喜田貞吉と原 秀四郎—四国が生んだ二人の歴史地理学者—」伊予史談 358, 2010, 15-28 頁。筆者は以前, 雑誌『歴史地理』に関する小論でも喜田に言及したが, 喜田を主題としているわけではないだけにその考察は必ずしも十分ではない。②川合一郎「明治・大正期における雑誌『歴史地理』—同時代の研究者による評価を中心に—」歴史地理学 48-4, 2006, 27-28 頁。
- 8) ①前掲 1) ①2-5 頁, ②菊地利夫「内田寛一教授の歴史地理学上の位置と学風」歴史地理学紀要 I (本質と方法), 1959, 13-14 頁, ③前掲 1) ②2 頁, ④岡田俊裕『日本地理学史—個人史的研究』古今書院, 2000, 31 頁, ⑤同『地理学史人物と論争』古今書院, 2002, 20 頁など。
- 9) 最近, 岡田俊裕が『日本地理学人物事典[近代編 1]』において喜田貞吉をやや詳しく取り上げているが, 事典という性質上, あくまでその生涯と学問の概観にとどまっている。岡田俊裕『日本地理学人物事典[近代編 1]』原書房, 2011, 202-209 頁。
- 10) 例えば東北大学文学部の日本史研究室には, 大名領地調査の関係資料など計 10 点が保管されている。伊藤大介「東北大学日本史研究室所蔵の喜田貞吉関係資料について」東北アジア研究 11, 2007, 223-235 頁。また徳島県小松島市内にある喜田貞吉の生家には, 喜田の自筆書簡や小学校時代のノート, 『日向国史』出版に関わる依頼元・宮崎県からの書簡など数十点が残されている。喜田貞吉の兄宇吉のひ孫にあたる喜田和彦氏からのご教示による。しかし徳島大附属図書館の所蔵資料数は, 管見の限り国内最大である。
- 11) 喜田の生涯に関する記述は, 特に断らない限り『還暦記念 六十年之回顧』による。ここでは以下を参照にした。喜田貞吉「還暦記念 六十年の回顧」(『喜田貞吉著作集 第 14 巻』平凡社, 1982), 5-238 頁。1933 年初出。
- 12) 帝国大学『帝国大学一覧 従明治廿九年 至明治三十年』, 1896, 322 頁。なお, 大学院での主たる指導教授は史学科の坪井九馬三であった。坪井は史学者であったが, 地理学や歴史地理学にも深い造詣を有しており, 喜田の学問観にも影響を与えたようである。前掲 7) ②26-28 頁。
- 13) 喜田の大学院進学以前の『帝国大学一覧』を見ても, 歴史地理を研究テーマに掲げる大学院生は確認できないことから, 喜田が嚆矢であると判断した。
- 14) よく知られているように, 東京地学協会は英文表記では「Tokyo Geographical Society」であったが, 日本語表記では「地理学」ではなく「地学」であった。このため日本歴史地理研究会は, 日本語の「地理」という文言が入ったわが国初の学会となった。
- 15) 喜田貞吉「歴史地理学」(予備整理番号 A4), 徳島大学附属図書館所蔵。
- 16) 雑誌『歴史地理』の「研究綱目」は, 「古跡」をはじめ「地勢の変遷」, 「古今の地理上の智識」, 「政治地理」であった。のちに「一般の歴史」と「一般の地理」が追加されている。前掲 7) ②21 頁。
- 17) 東京帝大では明治 39 年 9 月から大正 2 年 7 月まで, 京都帝大では明治 41 年 2 月から亡くなる前年の昭和 13 年まで講師や教授を務めた。講義科目は, 東京帝大では「地理学」や「国史地理」で, 京都帝大では「国史地理」をはじめ「日

本古代史」,「国史講読」,「古代史の特殊問題」,「日本民族史」などであった。京都帝大での国史地理講義は昭和8年度を最後に終了し,その後は古代史や民族史のみとなっている。なお,当時の東京帝大の講義科目は『史学雑誌』の毎年9号あるいは10号に,京都帝大の講義科目は,史学科を母体とする史学会の機関誌『史林』の毎年2号や3号などに掲載されている。

- ¹⁸⁾ 『官報 第7899号 明治42年10月21日』,593-594頁。なお,博士論文の構成は,第1編「平城前史」,第2編「平城京史」,第3編「平城京内ノ條坊」,第4編「平城京外ノ條里」,附録「古建築年代考」,および附図3枚であった。
- ¹⁹⁾ 原の学位取得は明治38年11月,吉田は同42年7月であった。川合一郎「明治の歴史地理学者・原秀四郎—その伝記書誌的考察—」『歴史地理学』51-3,2009,17頁。
- ²⁰⁾ 東京帝大については,文部省が休職満期となった大正2年に辞任している。
- ²¹⁾ (無署名)「東北帝国大学二於ケル講義題目表(大正十三年-昭和十四年)」(東北帝国大学国史学会編『喜田博士追悼記念 国史論集』大東書館,1942)297-300頁。
- ²²⁾ 前掲3)参照。
- ²³⁾ (無署名)「喜田貞吉博士の逝去」『史学雑誌』50-8,1939,1081-1082頁。
- ²⁴⁾ 本資料の寄贈主は徳島大学名誉教授の石躍胤央氏である。石躍氏は日本近世史専門の歴史学者で,資料を東京の古書店から入手して徳島大学の同氏の研究室にて保管していたが,退官後の平成16(2004)年に図書館へ寄贈している。徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部の桑原恵教授からのご教示による。
- ²⁵⁾ 長谷川賢二「徳島大学附属図書館所蔵喜田貞吉関係資料に関する所見」,2009,同「喜田貞吉関係資料目録(仮)」,2009。この所見と資料目録(仮)は,徳島大学附属図書館のウェブサイト上で公開されている。
<http://www.lib.tokushima-u.ac.jp/siryou/personallist.html#kida> 平成24年9月1日閲覧。なお平成23年10月から12月にかけて,本資料の一部が徳島大学附属図書館にて展示・紹介されている。
- ²⁶⁾ 長谷川氏は本資料を次の6群に分類している。A:原稿,筆写史料等(270件),B:講演録(34件),C:ノート(75件),D:日本歴史地理研究会・日本歴史地理学会及び東北文化研究会の運営関係資料(24件),E:第3者の原稿・スクラップ・収集史料等(100件)。F:書簡等(327件(383通))。長谷川氏は計830件の資料に対し,資料検索の便宜を考慮して予備整理番号を付している。本資料の引用にあたっては,この予備整理番号を付すこととする。
- ²⁷⁾ その他,歴史地理の観点から興味深い資料としては,例えば以下のものがある。
「遠江国浜名湖口の沿革」(『歴史地理』1巻1号掲載の論文原稿),「藤原京に就いて」(未発表原稿か),「大名領地沿革調査報告書 第一回・第二回・第三回」(関係先への調査進捗報告書),「第五回夏期講演会招待状発送名簿」(招待状送付先に神保小虎や小藤文次郎,田中阿歌麿,山上万次郎,志賀重昂など地質学・地理学者の名が記載)など。
- ²⁸⁾ 喜田の講演録・講義ノートは歴史地理学だけではなく,地理学・地理教育や古代史,民族史,考古学などに関するものも残っている。
- ²⁹⁾ 講演録はいずれも速記者などによる筆録原稿で,喜田自身の手になるものではないが,「山陰地方の古代」や「地理学とは何ぞや 第一回」のように,筆録原稿に喜田自身が大幅に加筆修正したものも残っている。
- ³⁰⁾ 喜田の講演録は少なからず活字化されているが,徳島大学附属図書館所蔵の講演録はいずれも未発表である。ただし「地理学とは何ぞや 第一回」は,明治

40 年の論考「地理学の性質を論じて、普通教育上に於ける地理科の地位に及ぶ」や同年の「地理学に関する余輩の見解」と内容的に共通する部分が多い。①喜田貞吉「地理学の性質を論じて、普通教育上に於ける地理科の地位に及ぶ」教育学術界 15-2, 1907, 130-139 頁, ②同「地理学に関する余輩の見解」(同『喜田貞吉著作集 4 歴史地理研究』平凡社, 1982) 357-373 頁。1907 年初出。また「歴史地理学」(予備整理番号 A4) は明治 41 年 8 月に行なわれた日本歴史地理学会鎌倉講演会での講演録であり, 「山陰地方の古代」(予備整理番号 J28・27) は大正 6 年 8 月に行われた同米子講演会での講演録であるが, それぞれの講演の要旨が雑誌『歴史地理』に掲載されている。③(無署名)「歴史地理学(文学士 喜田貞吉君)」歴史地理 12-3, 1908, 279-280 頁, ④(無署名)「古代の山陰道・古代の山陰道(続)(文学博士 喜田貞吉君)」歴史地理 30-4, 1917, 2-4 頁。

³¹⁾ 『還暦記念 六十年之回顧』所載の著作目録には, 大正 6 年 8 月の著作として「古代の山陰道(講演筆記・未刊) 米子夏期講演会」があるが, 本資料中の「山陰地方の古代」のことであろう。前掲 11) 555 頁。しかしこれ以外の所蔵資料で著作目録に記載されたものは見当たらない。

³²⁾ 講義ノートのうち, 東京専門学校での講義内容である「日本地理講義」(予備整理番号 F23) は, 喜田自身が作成したものではなく受講生による筆記録を喜田が借り受けて筆写したものである。

³³⁾ 喜田の講義ノートそのものは未発表であるが, 受講生の筆記ノートが活字化された事例はある。管見の限りでは, 昭和 10 (1935) 年における喜田の講義「古代史の特殊問題」の受講生である角田文衛が, 後年, その筆記ノートを加筆修正して発表している。喜田貞吉「我が建国と皇室に関する歴史上の諸問題」古代文化 6-2, 1961, 27-34 頁, 古代文化 6-4, 1961, 83-86 頁, 古代文化 6-6, 1961, 140-144 頁, 古代文化 7-2, 1961, 50-55 頁, 古代文化 8-2, 1962, 32-35 頁, 古代文化 8-3, 1962, 57-60 頁, 古代文化 8-5, 1962, 118-122 頁, 126 頁。

³⁴⁾ 例えば大正 14 (1925) 年から昭和 2 (1927) 年まで京都帝大文学部史学科で学んだ肥後和男によれば, 「先生は講義にノートを作らず, 頭陀袋から小さいメモを出して話をされた」と回顧している。肥後和男「喜田先生の思い出」古代文化 41-7, 1989, 49 頁。

³⁵⁾ 前掲 8) ②13 頁。

³⁶⁾ 前掲 6) 11 頁。

³⁷⁾ 前掲 8) ⑤20 頁。

³⁸⁾ 喜田は歴史地理学に関する考えをいくつかの公刊論著で述べているが, なかでも比較的にとまっているものとして, 修正版地理学講座『日本の歴史地理』の記述がある。それによれば「歴史地理学とは地理上の諸現象の歴史的研究, 即ち自然地理の現状が過去に如何なる沿革を経て居るか, 又人事地理上の諸現象が, 過去に於て如何なる変遷発達をなしたか等の事柄, 即ち古代の地理上の諸現象を, 時代的に継続して説明する学問であると解したい。或は歴史上の諸現象を, 主として地理に即して説明することをも, 其の一部として取扱ふ場合もあり得るが, 併しそれはむしろ歴史の一部であって, 地理を以て歴史資料の一として取扱ったものと謂はなければならぬ。(略) それを以て直ちに歴史地理学の本体であるとは謂はれない」とし, 「歴史地理学は地理学の一部」と指摘している。前掲 3) ③1-2 頁。

³⁹⁾ 喜田貞吉「地理学とは何ぞや 第一回」(予備整理番号 A38), 徳島大学附属図書館所蔵。この講演会がいつ, どの団体の主催で行われたものか明らかではない。この講演録の表紙には「下関講演会」とあり, 主催者名は記載されて

いない。開催日については欠損していて判読不能であるが、翌日行われた第二回目の資料の表紙を見ると7月22日と判読できる。『還暦記念 六十年之回顧』に掲載された「旅行年譜」によれば、7月22日頃に下関を訪問しているのは明治41年7月20日 - 31日、同43年7月20日 - 28日、大正13年7月2日 - 22日の3回である。このうち明治41年は長府、下関、徳島を巡訪し、大正13年は朝鮮半島への経由地として下関を訪問しており、両者ともそれなりに忙しい行程である。従って講演会参加は、下関のみに滞在している明治43年7月が最も可能性が高いと考えられる。前掲11) 204頁、216頁。

- 40) この「人事地理学」は「人文地理学」と同義であると考えられる。例えば前出の論考「地理学に関する余輩の見解」では、地理学を「自然地理学、人文地理学に二大別」しており、ここからも「人事地理学」と「人文地理学」は同一のものであることが分かる。前掲30) ②364頁。また講義ノート「国史地理講義稿 第一」でも、「人事地理学」を「人文地理学」と言い換えている箇所がある。喜田貞吉「国史地理講義稿 第一」（予備整理番号H12），徳島大学附属図書館所蔵。
- 41) 前掲39)。なお、喜田の言う「産業地理学」「経済地理学」「物産地理学」の違いが明らかではないが、ここでは原文のままとした。
- 42) 喜田貞吉「歴史地理」（予備整理番号A43），徳島大学附属図書館所蔵。この講演録には時期の記載がないが、本文中に「地理学のことは丁度二三日前に出ました教育学術界の雑誌に書いて置きました」との記載が見られ、時期を推定する上で参考となる。喜田が『教育学術界』誌に論考を載せたのは、明治40年5月5日発行の『教育学術界』第15巻第2号の「地理学の性質を論じて、普通教育上に於ける地理科の地位に及ぶ」のみであることから、この講演会「歴史地理」の時期を明治40年5月と推定した。
- 43) 前掲42)。
- 44) 小牧実繁『先史地理学研究』内外出版印刷，1937，48頁。
- 45) 喜田貞吉「国史地理学」（予備整理番号K5），徳島大学附属図書館所蔵。
- 46) 喜田貞吉「歴史地理学一斑」^マ（予備整理番号A7），徳島大学附属図書館所蔵。
- 47) 喜田は「地理学に関する余輩の見解」において、「今日の進歩したる地理学にありては、必ず、系統的説明を施したるものならざるべからず（略）しかれども、現今の地理学界の状態にありては、こは自然地理についてのみ言うべくして、人文地理についてはいまだこれをいうべきの地位に到達せざるなり」と述べてその未発達を指摘している。前掲30) ②369頁。
- 48) 前掲46)。
- 49) 前掲42)。
- 50) 前掲45)。
- 51) 日本歴史地理研究会の設立趣意書（『歴史地理』1巻1号掲載）には「地理学は史学の眼の一なり」という言明や「地理は最も価値ある史料の一として、史的事実研究上尠少ならざる光明を与ふるを見るべし」といった言明があり、研究会の歴史地理学の評価やイメージを決定づけていた。しかしこの言明は、メンバーの一人である小林庄次郎の歴史地理観であり、喜田やその他の主要メンバーのものではなかった。前掲7) ②25-30頁。
- 52) 大森金五郎「開会の辞（日本歴史地理学会主催 鎌倉講演会記事）」歴史地理12-3，1908，255頁。
- 53) 前掲42)。
- 54) 前掲42)。
- 55) 喜田貞吉「国史地理講義」（予備整理番号D72），徳島大学附属図書館所蔵。

-
- 56) 喜田貞吉「国史地理資料（一）」歴史地理 8-10（附録），1906，935 頁。
- 57) 前掲 46）。
- 58) 前掲 42）。
- 59) 前掲 45）。
- 60) 前掲 55）。
- 61) 喜田は講義ノート「国史地理講義」において、「地球表面ノ変遷」すなわち自然地理と「過去人類ノ遺物遺跡」の研究を，歴史地理学の入門として位置づけている。前掲 54）。喜田はその著『日本の歴史地理』においても，冒頭で「自然地理の変遷」と「遺物遺跡の研究」を取り上げている。前掲 3）③2-11 頁。
- 62) 前掲 11）170 頁。
- 63) 前掲 55）。
- 64) 喜田貞吉「国史地理講義」（予備整理番号 B11），徳島大学附属図書館所蔵。
- 65) 第 3 章の「日本民族（天津神と国津神・帰化の諸蕃・日本民族の成立）」や第 4 章の「特殊の諸民族（日本民族と特殊民族・国法上の諸賤民・浮浪民）」を参照。前掲 3）③27-62 頁。
- 66) 前掲 64）。
- 67) 喜田貞吉「帝都」（『喜田貞吉著作集 5 都城の研究』平凡社，1979）8-9 頁。1915 年初出。
- 68) 喜田の講演録「上代の帝都」においてもその傾向が見られる。喜田はこの講演においては，「帝都と云ふことの意義」および「遷都と云ふことの顛末なり，其意義」，さらに「都の位置」の 3 つについて論じているが，前二者は歴史地理というより古代都市史的な要素が少なからず含まれている。喜田貞吉「上代の帝都」（予備資料番号 A5），徳島大学附属図書館所蔵。
- 69) 喜田は，博士論文の第 1 編「平城前史」のなかで天智天皇の「淡海朝廷論」を取り上げ，第 2 編「平城京史」では都城変遷の政治的背景などについて論じている。前掲 18）593 頁。
- 70) 喜田貞吉「日本歴史地理研究の沿革概観」（史学会編『本邦史学史論叢』，富山房，1939）1369-1406 頁。
- 71) 前掲 45）。
- 72) 喜田は歴史地理学と考古学についても，定義上は明確に分類していた。喜田は講義ノート「国史地理概説一」において，「考古学カ遺物遺跡ヲ見ルノト地理学者カ此ヲ見ルトハ多少ノ相違アリ。考古学者ハ此ニヨリテ当時ノ社界状態ヲ明カニセントスルモノニシテ，其範圍頗ル広ク，地理学者ノ見方ハ主トシテハ当時ニ於ケル水陸分布ノ状態，人類ノ住所等地理ニ関スル事項ニ限ラル（一部読点を句点に変更。一部読点補足）」と指摘し，両者の違いを述べている。喜田貞吉「国史地理概説一」（予備整理番号 K6），徳島大学附属図書館所蔵。しかし実際の研究において区別が曖昧であった点是否めない。
- 73) 例えば「上代の武庫地方」では，摂津の武庫地方という一つの地域を取り上げているが，歴史事象や考古学的事象などについて詳しく紹介しているものの歴史地理学的観点は十分ではない。喜田貞吉「上代の武庫地方」（同『喜田貞吉著作集 4 歴史地理研究』平凡社，1982）86-121 頁。1919 年初出。
- 74) 喜田はこの論考で，浜名湖口の地形的变化とそれに伴う交通路の変遷について，文献や古図，地名を踏まえて論じている。喜田貞吉「遠江国浜名湖口の沿革」歴史地理 1-1，1899，7-11 頁，口絵。
- 75) 以下の記述を参照。「都城ノ形ノ南北ニ長キハ藤原京ノ地形ノ自然ノ結果ヨリ来リシモノト思ハル，恐クハ天智天皇ノ大津京モ其ノ地形ヨリ参スルニ南北ニ

長シ宮ナリシナルベシ，平城京ニ至リテハ田籍ノ實際上ノ調査ヨリ，明ラカニ其ノ事実ヲ知ルヲ得ベシ」。前掲 45) より引用。

- ⁷⁶⁾ 以下の記述を参照。「墳墓ノ時代ヲ大体定ムルヲ得バ，墳墓ノ配置，分布，大小ニヨリ，其ノ地方発展ノ時代，順序，他ノ地方トノ関係明ラカトナルベシ（一部読点を補足）」。前掲 45) より引用。
- ⁷⁷⁾ 小川琢治『人文地理学研究』古今書院，1928，142 頁。
- ⁷⁸⁾ 石橋五郎「我国地理学界の回顧」地理論叢 8（石橋博士還暦記念論文集），1936，5 頁。
- ⁷⁹⁾ 藤岡謙二郎『回想と自己批判』大明堂，1978，13 頁。
- ⁸⁰⁾ 藤岡謙二郎他『新訂 歴史地理（人文地理ゼミナール）』大明堂，1990，4 頁。
- ⁸¹⁾ 前掲 3) ④3 頁。
- ⁸²⁾ 京都帝大での喜田の還暦記念祝賀式で司会を務めたのが小川（当時京都帝大名誉教授）であり，晚餐会でスピーチしたのは教授の石橋であった。この晚餐会には助教授の小牧実繁や教室出身の藤田元春も出席しており，喜田と地理学教室との交流の一端がうかがえる。前掲 11) 186-197 頁。
- ⁸³⁾ さらにいえば喜田自身，自らが提起してきた歴史地理学の位置づけと自身の研究手法とが乖離していること，言葉を換えれば自身の研究手法が地理学のそれではなく，むしろ歴史学に近接することを自覚していた可能性もある。この「独自の見解」という表現には，その自覚が含意されているとも推測できるが，この点については今後の検討課題としたい。
- ⁸⁴⁾ 京都帝大地理学教室で学んだ地理学者の中で，喜田の歴史地理学を肯定的に評価する数少ない一人が村松繁樹である。村松は，喜田が小川琢治や石橋五郎とともに京都（帝国）大学の「歴史地理学派」の形成に一役買っていたと指摘する。しかし同時に村松は，喜田の歴史地理学を「地理学に於ける歴史地理」ではなく「史学に於ける歴史地理研究」と考えていたようである。村松繁樹「日本に於ける歴史地理研究史」日本史研究 7（歴史地理学特輯），1948，805-806 頁。
- ⁸⁵⁾ 京都帝大関係者以外で喜田の歴史地理学について論じている地理学者は少ないが，そのなか小田内通敏は，大正 7（1918）年の論考で，「喜田博士一派の人士」が発行した雑誌である『歴史地理』について触れている。小田内はこの雑誌について，歴史地理という用語を普及させた功績を評価しつつも，その研究内容は「十分に批判的態度」で論ずる必要があると指摘している。小田内通敏「歴史地理の研鑽法につき（一）」秋田魁新報 大正 7 年 3 月 9 日記事。この小田内の言葉は喜田自身に向けたものではないにせよ，喜田と『歴史地理』をほぼ同一視していると見て問題ないと思われる。
- ⁸⁶⁾ 菊地および浅香によれば，喜田は京都帝大史学科を拠点に歴史の地理的解釈としての歴史地理学を発展させ，多くの後継者を養成して一つの学派を樹立したとされる。前掲 8) ②13 頁，前掲 1) ②2 頁。
- ⁸⁷⁾ 小野菊雄は日本歴史地理研究会（学会）の歴史地理研究について，「大正以後の地理学特に人文地理学的研究の発展への一つの萌芽—非常に微々たるものではあるが一であったとも推測しうる」と述べている。小野菊雄「明治時代の地理学」人文地理 14-1，1962，93 頁。しかしこの言説は喜田自身に限定したものではないこと，および小野自身が「尤もこれには更に詳しい分析が必要であろう」と指摘していることから，喜田の歴史地理学と近代人文地理学との連続性については，今後詳細な検討が必要であろう。
- ⁸⁸⁾ 京都帝大に日本初の地理学教室が設置されたのは，経済史学者内田銀蔵の功績であった。内田は地理学にも見識を有しており，大正 4（1915）年の講演「史

学地理学と他の諸学科との連絡関係に就きて」の中で地理学について触れている。そこで内田は、地理学における歴史的解釈の重要性、自然地理学の進展と人文地理学の未発達などについて論及しているが、こうした論点は、本章で述べた喜田のそれと驚くほど共通する。内田銀蔵「史学地理学と他の諸学科との連絡関係に就きて」（同『史学理論（内田銀蔵遺稿全集 4）』同文館，1922）206 頁。喜田と内田が東京帝大国史科の同級生であり、親交があった点を踏まえると、あるいは喜田が内田に影響を与えた可能性もあるが、この点についても今後の検討課題としたい。